母は癌で亡くなった。病院のベッドで泣き崩れる父の傍らに、きょとんとたっていた。幼かったあの頃、私には何が起きたか理解できなかった。母がただ眠っているように見えて、「お母さん、眠いの？おふとん、持ってこようか？」と母をゆすって聞いたらしい。そんな姿を見た父は私を抱きしめて、「お母さんはもう、この世界にはいないんだよ。死んだんだ。」といった。その言葉で私はやっと気が付いたのだ。母が亡くなったことを。もともとお金がなかったので、葬式は簡素なもので、両親の親戚も少なかったため、さみしいお葬式だった。

泣きじゃくる毎日が続いた。母が骨になって小さな壺になってから、母を思い出すたびに母の壺に抱き着いて「お母さん」と言っては大きな声で泣いた。
父は母が死んでから、酒ばかり飲んで、働かなくなった。そして、私に暴力をふるうようになった。最初のうちは母の壺を抱きしめて泣いていたが、そのうちその壺が無くなってしまった。母方の親族が、母の壺を持って行ったらしい。父は何も言わず、ただいらだって酒臭い息を吐いて私を蹴とばした。

私が母方の親戚の家に行くことになったのは、母が亡くなって一年ほどのことだった。父の暴力は日に日に増し、ついに親戚は父を警察に突き出したのだ。その後はどうなったかわからないし、その一年ほどの記憶が私からすっぽり抜け落ちてしまっていたが、痛々しいあざがたくさんできていたようだ。

親戚と言っても、私は本当に遠い親戚のしかもおばあさんのもとに預けられた。おばあさんは無口な人で、おじいさんは三十年前に亡くなっている。

二人の食事のときはいつも会話がなかった。もぐもぐという音が聞こえるくらい、あたりはシーンとしていた。途中、「残さず食え」というおばあさんの声が聞こえるが、いつも私はこくんとうなずくだけで、言葉を発しなかった。私は言葉をしゃべることができなくなっていた。

お母さんに手紙を書き始めたのはそのころこのとだ。お母さんに、悩みをぶつけたかったのかもしれないし、お母さんが亡くなったことがまだ信じられなかったのかもしれない。

「お母さんへ☆　お母さん、げんきですか？わたしはちょっとかぜぴきです。お母さんのだいこん水あめが食べたいです。」
そして、それをお母さんのお墓の前に置くことにした。その時期に咲いている花と一緒においてきた。次の日行ってみると、手紙が無くなっていた。その当時はきっとお母さんがっていって読んだんだ、と思っていた。しかし、返事が来ないことにがっかりした。

お母さんへの手紙は私が高校を卒業し、働きに出るまで続いた。おばあさんとの会話もなく、学校では一人ぼっちだったけれど、おばあさんはお金をだして高校に行かせてくれた、という思い

から、一日も休まずに通った。ひどいいじめにもあった。でも、そんなときはお母さんに手紙をだした。
「お母さんへ　お母さん、私は小学校一年生になりました。おともだちはできません。私、しゃべることを忘れてしまいました。」
「お母さんへ　ともだちって、どんなものなんですか？わたしにはいないのでわかりません。」
たくさん書いて、たくさん泣いた。そして、欠かさずお母さんのお墓に持って行った。いつも、次の日にはなくなっている。

ある日、仕事を終えて家に帰ると、おばあさんが倒れていた。唖然としている間もなくかけより、声をかけた。久々に声がでたのだ。
「おばあちゃん？おばあちゃん？」
救急車で運ばれ、おばあちゃんは入院することになったが、病状は深刻で、助かる見込みがなかった。一人くらい部屋で、私はただ泣くことしかできなかった。どんなにぬぐっても、涙が止まらなかった。

それから三か月間、仕事と病院の行き来したが、とうとうおんばあさんはその時が来た。
おばあさんのしわしわの手を握りしめていると、おばあさんが不意に口を開いた。
「あんたの手紙、お母さんに届けるから。心配せんと、あんたはちゃんと生きて、いっぱい幸せになりなさい。」
そして、私の手をぎゅっと握りしめて、そしても引出をあけてほしいといった。おばあさんの手からそっと手をはなし、引出をあけると、私が今まで書いた手紙が、きちんと束ねられてはいっていた。
「それ、わしの手に持たせて、棺にいれろ」
手紙の一番上がびしょびしょになった。

それから二十歳の誕生日、成人した私に手紙が届いた。お母さんからだった。

「二十歳の誕生日おめでとう！お母さんは心からこの手紙を読んでいるあなたが成長して、て、素敵な女性になっていると信じています。お母さん、なんにもできなくてごめんね。お母さんはあなたを置いて行ってしまう事が何より悲しかった。本当に、神様を恨みました。でも、あなたなら、心がきれいで優しいあなたなら、きっと素敵な女性になっていると思って、神様を恨むのをやめました。これから、どんなことがあっても神様や人を恨んではダメ。あなたの心が荒んでしまいます。だから、いつも人に対して、笑顔になって、元気な声であいさつ！自分の心を開いて！きっと、いつかみんなも心を開いてくれるから。それじゃあね。これしか書けなくてごめんね。」

お母さんの手紙の送り先は、東北の方、私の故郷のほうだった。休みの日、私はその住所を尋

ねた。そこにいたのは、お父さんだった。そして、新しい若い奥さん。奥で子供の声もした。
「あ、元気か？実はな…」
お父さんはしどろもどろになった。
私はお父さんの言葉を制し、
「この前、お母さんから手紙が届いたの。おばあちゃんが今までの手紙、届けてくれたんだと思う。」
お父さんは困惑した顔をしたが、
「あの、その、すまない！」
と言って土下座をした。
私はお父さんに向かってこういった。
「お父さん、私は平気よ。お母さんに言われたの、人を恨んではダメって。だからお父さんのことも恨んだりしないわ。幸せなってね。」
お父さんは私を見つめ、そして目がうるんできて泣き崩れた。

拝啓、お母様。私、大きくなりました。素敵かはわからないけど、お母さんみたいな女性になりたいです。